

部の編纂に係る。別に附録實傳が載せられる。

ゼニヤサハチロウ 錢屋佐八郎 五兵衛の

次男。その疑獄事件に關することは五兵衛の條に記した。嘉永六年永牢の宣告を受けたが、妻てい、が代牢を出願したによつて、安政四年十二月特に赦され、慶應二年に歿した。佐八郎俳句を好み、號を素由又は曾由といふた。

ゼニヤジケンセンキドメ 錢屋事件詮議留

別に錢屋五兵衛詮議留の名もある。錢屋五兵衛及びその子要蔵に對する郡奉行・改作奉行及び宮腰町奉行下詮議の際連累一同から徴した口書を集めたものである。

ゼニヤチカ 錢屋ちか 錢屋喜太郎の女。

喜太郎嘉永六年永牢の刑に處せられた後、ちかは屢父に代つて入獄せんことを請うたから、藩はその孝心の厚きを賞し、安政四年十二月特に喜太郎を許して出獄せしめた。ちか俳句を好んで略その堂に入り、後病を得て山中温泉に在るや、日夕吟嘯を事とした。その染筆には多く千賀女と書かれて居る。

ゼニヤヨウソウ 錢屋要蔵 五兵衛の次子。

その疑獄に關することは錢屋五兵衛の項に述べた。要蔵亦父兄と共に俳諧を弄して、路堂又は雲樵と號し、傍ら謠曲を能くした。その居を鷲立閣と稱したのは、書道を愛するからであつた。

セミヲリブエ 蟬折笛 源義經が奉納した

ものと傳へ、珠洲郡須須神社に存する。富田景周云ふ、『蟬折は竹のせみを殺したる笛の名也。按ずるに、蟬折笛は高倉宮の秘物たれども、落牢の際圍城寺の本尊へ萬秋樂の秘曲を奏して進給せさせ玉ふ、と盛衰記にあり。義經の手にわたること來由如何。』との來歴

を考へるまでもなく、いづれ否定していゝものである。

セリイケ 芹池 鳳至郡西二又の内の小字。

セリカハ 芹川 鹿島郡淺井庄に屬する部落。能登名跡志に、『芹川村近し。兵衛と云うて十村あり。櫻井氏也。又この村に蛇池といふておそろしき池あり。』とある。

セリカハハラヤマブン 芹川原山分 鹿島

郡淺井庄に屬する部落。
セリダゴウ 芹田郷 加賀郡の古郷名である。和名抄に『石川郡芹田、世利多』とあるは誤である。今河北郡に千田がある。

セリヨウ 世涼 ↓タチヤセリヨウ 館屋

世涼。
セリヨウ 瀬領 能美郡粟津郷に屬する部落。
セリヨウ 瀬領 リョウ 石川郡岸川庄に屬する部落。混見摘寫に、この村の端に藤内屋敷といふ藪があり、そこに住んでみた者の子孫に金澤折違橋の瀬領屋といふのがあつて、佐久間盛政の比の舞大夫であつたと記する。

セリヨウイシ 瀬領石 能美郡瀬領から産

する石材。石英粗面岩質凝灰岩で、長石類の分解した白色石基中に草色角閃石様物質の分解したものを含み、脆弱である。
セリヨウコウセン 瀬領鑛泉 能美郡瀬領

に在る。明和・安永の頃澤村の十村役であつた源次が初めて浴槽を作つたが、洪水に遇うて廢したといふ。能美郡名跡志に、この村に湯谷といふ所があり、古へは湯を出したといふので、里人之を穿つて舊湯の木材を得たが、低温で用を爲さなかつたといふのは是である。明治廿四年瀬領の人瀬川清次郎之を再

興せんとし、掘鑿三年を経て稍温度の上昇を見たから、鑛泉として營業を初めた。

セルベントゴウ せるべんと號 英國軍艦

で、慶應三年五月廿六日七尾港に入り、灣内測量のことに従つた。乗組は艦長ブロック、通譯官アストン、士官十二人、兵士百人許であつた。同年七月八日セルベント號は再び入港した。

セワタ 背脇 能登の名産であつた。親元

日記文明十三年六月二日の條に、『富山左衛門佐殿より御進上、公方様背脇十桶。』と見え、その他所見が多い。↓シホカラ 塩辛。
セヲケンソウ 瀬尾健造 初名他之助、諱

は惟實、字は子疆、劍北はその號で、石川郡鶴來の人。安政の初め金澤に出て、金子崎の門に入り、經史を研究し、又交を藤田維正・井口濟・野口之布に結んで疑義を質した。幕末騒擾の際、健造志を同郷の士小川幸三と同じくし、藩吏の監視を受くること頗る厭であつたが、僅かに連累の罪を免れ得た。維新の後北越に従軍し、柏崎縣に徴され、三條民政局租稅方となり、次いで金澤藩民政寮書吏となり、史生に進み、學制の擴張せらるゝに及び、文學訓導に任じ、爾後諸學校に教鞭を執つた。明治三十七年三月歿、享年六十六。劍北遺稿がある。

セオジンジャ 瀬尾神社 珠洲郡秋吉に在

つて、今は瀬瓜神社と稱して居る。式内等舊社記に、『瀬尾神社。木郎郷秋吉村鎮座。稱「瀬尾明神」とある。
セヲツグモト 瀬尾紹元 通稱餘一。本姓御園氏。文久三年二月前田齊泰の上洛せんとした時、紹元遊學して江戸に在つたが、之を

聞いて急遽西上し、時務に關して所見を俟に上つたが、藩吏は紹元が擅に旅行した故を以て、藩に送還して謹慎せしめた。既にして紹元はその罪を赦され、尊攘の志士と相往來して國事を議し、元治元年前田慶慶返京の際には紹元又江戸に在つたが、變を聞いて歸國するや、直にその家に謁せしめられ、慶應三年三月廿六日病んで歿した。年三十一。大正十五年四月靖國神社に合祀せられた。

センウンボウ 仙雲峰 石川郡吉野の十景

の一つ。雲龍山に並び、嶺上に馬頭觀音堂がある。
センオウジ 全翁寺 鳳至郡波志借に在つて、曹洞宗に屬する。永正六年大林藻梅の開山といふ。

センガイエキドウ 萌崖奕堂 曹洞宗の僧。號は無似子、別に三界無頼ともいひ、俗姓は平野氏、名古屋の人。十四歳出家し、聖應寺曉林に師事し、後出遊して越後に至り黃龍寺道契に仕へ、天保四年美濃の全昌寺洞門を訪ひ、尋いで大坂に往き風外に就き、十二年又風外に京都に侍し、遂に印可を受け、弘化元年大慈山に移り、二年播磨龍海院に住し、安政四年金澤天徳院三十三世に轉住し、明治元年永平・總持の相争ふに當り、其の調和に力を盡くし、三年大衆の推舉によつて總持寺獨住一世となり、弘濟慈徳禪師の號を賜はつた。十二年東國に巡化して羽前の善寶寺に入り、八月廿四日七十五歳を以て寂した。

センガク 顯學 河北郡二日市眞宗東派誓入寺に生まれ、金澤唯念寺十三代の住持となつた。法名智顯。寛政七年高倉學寮の寮司に任じ、文政八年加賀法論にお頼み方として本